

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月10日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520385

研究課題名（和文）南戯「劉希必金釵記」の文字学・方言学などによる総合的研究

研究課題名（英文）A Study on the Manuscript of Chinese Drama *Liu Xi Bi Jin Chai Ji* by method of dialectology and graphology

## 研究代表者

福満 正博（FUKUMITU MASAHIRO）

明治大学・経営学部・教授

研究者番号：60165313

研究成果の概要（和文）：中国明代宣徳年間抄本「金釵記」は、二つの特徴を持っている。一つは写本の字体が、当時の戯曲小説などの俗文学の出版された刊本の字体に類似していることである。そこで、抄本の原本は福建の建安で出版された元刊本と推測した。二つ目は、通仮字の音声的特徴で、そこから原本「金釵記」は、江西省の吉安で書写されたと推測した

研究成果の概要（英文）：This research reports on an analysis of the manuscript. This manuscript has two features. One feature is the shape of the characters. This feature indicates that the place of publication is “Jinchaiji”. That is Jianan of Fujian Province.

The other feature is its phonetic characteristics. This phonetic features suggest to us that this manuscript was transcribed at Jian in Jiangxi province.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：中国文学、中国語、戯曲、南曲、文字学、方言学、金釵記(劉文龍)、抄本

## 1. 研究開始当初の背景

## 1) はじめに

私は、シャーマニズムと中国演劇の成立というテーマで研究をしている。本研究は、その基礎研究として、宋元時代に由来する初期の演劇作品を厳密に見直そうとする作業の一環である。

「劉希必金釵記」という演劇作品は、明代の古い記録に「宋元旧篇」（中国演劇の起源である宋元時代からあった古い作品という意味）として、その名が記録されている古い作

品である。しかし実際には題名だけが残っていて、作品が伝承されず、いったいいかなる内容であるか不明の作品であった。

しかし、1975年に広東省潮安県の合葬墓から戯曲の抄本が出土した。それが、宣徳抄本「劉希必金釵記」である。出土文献は、宣徳七年六月の刊記を有し、中国の南戯（中国の南方の演劇に使われる呼称で、中国北方の演劇が「雑劇」と呼称されるのと対を成す）の中で、最古の作品である。

ところが、この作品は出土文献である関係

上、本文が判読しにくいなどのさまざまな理由で、従来十分な研究がなされてきたとはとても言えなかった。

本研究は、中国演劇史・文学史などの点から重要な意味を有する、宣徳抄本「劉希必金釵記」に対して、訓詁学・音声学・文字学・書誌学などの基礎的方面から総合的に検討を加え、「劉希必金釵記」の位置を明らかにし、その持つ意味を十全に解明するのが第一の目的である。

## 2) 従来の研究

明代宣徳抄本「劉希必金釵記」は、1975年12月に広東省潮安県鳳塘公社で発掘された、出土文献である。

その後、1982年の『文物』11期に、陳歴明によって「明初南戲演出本《劉希必金釵記》」として初めて世界に紹介された。そして、1985年に『明本潮州戲文五種』（広東人民出版社）に、抄本の影印が出され、その全貌が知られるようになった。

広東省潮州市で発掘された関係上、最初から潮州の地との関係を強調する論調が目立った。影印本『明本潮州戲文五種』の解説でも、「本文を検討してみると、朱墨毛筆の圈点があり、潮州方言が混じるなどのから、潮州の芸人の演出本である」と論じている。その後の研究論文も、おおむね潮州の演劇芸人の演出本であるということで、進められてきた。

これに対して、唯一出た異論は浙江省温州説であった。これは、作品中に出てくる「洗馬橋」という橋が、浙江省温州に実際にあるということを根拠としたものである。浙江省温州は、「温州雜劇」「永嘉雜劇」などという名称で、南戲の発祥地だという記録がある関係から、もともと温州で出された作品が、潮州まで海路によって伝承されたとも考えられ、それなりの説得性を有していた。

## 2. 研究の目的

### 1) 問題

宣徳抄本「劉希必金釵記」については、これまで中国中央戯曲研究院の研究者である劉念茲による校注『宣徳写本金釵記』（1985年）が出版されている。また、陳歴明が後に、『金釵記及其研究』（1992）を出版し、新たに校注を加えている。

私はこれまで、宣徳抄本「劉希必金釵記」に対して、3分の1ほど解読を試みてきた。それは以下の論文である。

● 南戲「劉希必金釵記」校議（1）、『明治大学教養論集』429号、2008年1月

● 南戲「劉希必金釵記」校議（2）、『明治大学教養論集』429号、2008年3月

これらは、劉希必金釵記の校本を基にしながらも、一つ一つの字の校訂を行ったものである。この論文の中で、わたしは抄本の一つ一つの字を可能な限り取り挙げ、その字形の由来を解明し、又従来の校訂とも比較検討して、その正誤を検討してみた。

ア) 字体について

宣徳抄本「劉希必金釵記」の字体は、必ずしも草書体ではなく、楷書体が基本である。それでも様々な字体があり、古くは漢代の帛書の隸書体から、漢魏時代の石刻字、唐代の敦煌文書と同じ字体など、様々な字体を見つけ出すことができた。しかし、その中で最も多いのは同時代の書籍の版刻の字体であった。今までに発見した字体が共通する書籍としては、『古列女傳』・『大唐三蔵取経記』・『劉知遠諸宮調』・『樂府新編陽春白雪』・『全相平話三国史』・『元刊雜劇』等であった。

従来、これらの戯曲小説の作品に使われる字体は、それまでの字体とは異なり「俗字」と呼ばれるものであった。甲骨文字から出発した漢字の字体はその後、隸書体から草書・楷書などを経て、宋代から版刻に使われる宋体字（明朝体）などが主流であった。それに対して、この時代に出現した多くの「俗字」は、後に現代の「簡体字」として大部分が連なって生き残っていくことは知られている。この領域で最初の研究は、劉復の『宋元以来俗字譜』（1930）である。劉復の研究は、宋・元・明時代の代表的な12種の戯曲小説の中から典型的な俗字を抜き出し、配列したものである。当時としても突出した研究であったが、それ以降現在までこれに類する研究は出現していない点から言っても、空前絶後の研究であった。

私は、宣徳抄本「劉希必金釵記」が、いったいどのような版刻の俗字と共通するものなのか探るために、この『宋元以来俗字譜』を利用したが、それでもかなり間違いの多い字典であることが判明した。そこで、もう一度俗字典を作り直すことも思い立ち、現在次の作業を継続中である。

● 『宋元以来俗字譜』補正（1） — 『古列女傳』、『明治大学教養論集』437号、2008年9月

これまで収集したのは、『古列女傳』中の俗字にとどまっているが、これから新たな俗字典を作る作業では、従来の12種に限定せず、より多くの戯曲小説の作品の俗字を新たに収録するつもりである。このような、作業を続けている中ではっきりとしてきたことは、宣

徳抄本「劉希必金釵記」は、演劇芸人の演出本ではなく、何らかの版刻を基にした写しであるということである。

#### イ) 音声について

宣徳抄本「劉希必金釵記」の中には、数十の通仮字（音が同じ当て字）があり、それらについても検討を加えてみた。

正字と当て字の二つの漢字音が一致するのは、どのような方言であるかという問題である。そうすると、いろいろな点から、潮州方言や温州方言では、それが説明できないということがわかってきた。宣徳抄本「劉希必金釵記」は、従来言われていたような潮州や温州との関係は無いということである。例えば、潮州の演劇芸人の演出本であれば、潮州の方言音の特徴が出てくるはずであるが出てこないどころか、矛盾する点が多数見つけられたのである。この点については、今年の学会で口頭発表した。

○日本中国学会第60回大会、「明代宣徳抄本「劉希必金釵記」について」、2008年10月

#### 4) 研究の全体構想

このように、まだ十分ではないが宣徳抄本「劉希必金釵記」の本文を厳密に検討してみると、従来の説と矛盾する問題を、多く見つけることができた。そこでこれまでの作業を続けていくことで、明代宣徳抄本「劉希必金釵記」の本文校訂を作成したい。

また本文校訂の基礎作業として、劉復の『宋元以来俗字譜』補正を作成したい。そうすれば、『宋元以来俗字譜』の誤りを正すことができるし、新たな作品を調べることでもっと多くの俗字を収集することができる。今までの書誌学は、作品の刊記だけを根拠にした、あやふやかな出版の歴史であった。ところがこのように作品の字体を根拠にすることで、新たに元代から明初にかけての確実な細かな出版事情が、より明確になる可能性がある。






明初の南戯については、この研究により新たに作品中の方言音を基礎に作品の出所を明らかにすることが可能になるはずである。そうするとこれまで外在的な証拠を基に曖昧に推測が進められてきた南戯の歴史が、これからは作品中の音声という内在的な確実な証拠を基に解明することが可能になってくる。



### 3. 研究の方法

#### 1) 研究方法ならびに研究内容の概略

本研究は、訓詁学・音声学・文字学・文学・書誌学など厳密な学問方法を駆使して、南戯の最古の作品である宣徳抄本「劉希必金釵記」を解明する。

ア) 文字学的方法というのは、宣徳抄本「劉希必金釵記」に使われている字を、一つ一つ取り上げ、その字体の由来歴史と、同時代の版刻中に於ける使用の分布を調べるものである

たとえば、原文の5頁の4行目には「」という字がある。これは「得」の草書体である。歴史的にはこれが初期に窺えるのは、漢代の武威醫簡・61に「」（已有膿者漬、毋得力作）とあるものである。東晋の王羲之、書札にも「」（『五體漢字彙編』）とある。唐代の敦煌文書の金剛般若波羅蜜講經P2133には「」（一切衆生聞説諸心、為是實心、故得破遣）とある。元代の『元刊雜劇』（單刀会）にもこの字が「」とある。同時代の作品として『樂府新編陽春白雪』、『明成化説唱詞話』などにも窺える。

また原文「」は10頁の6行目に見える文字である。これは「獨」の異体字である。同時代の版刻としては、『元刊雜劇』（蕭何追韓信）に「」としてみえる。また同時代の作品として『全相平話三国志』、『明成化説唱詞話』などにも同じ字形の字が窺える。

文字学的方法というのは、このように字体の由来・歴史を探ると共に、同時代のどの作品に使われているかを明らかにするものである。このようにすると、当時の具体的な出版状況がより精密に明らかにすることができ、またその中に於ける宣徳抄本「劉希必金釵記」の正確な位置づけを探ることができるようになるのである。

イ) 音声学的方法というのは、作品中の通仮字（同じ音の当て字）を使って作品の基礎方言を明らかにしようというものである。宣徳抄本「劉希必金釵記」は、中国の戯曲であるので当然「曲韻」を使う方法も考えられる。しかし、南戯の場合曲の句格が比較的自由であるので、それぞれの句末が韻を踏んでいるのかいないのかの判定が、非常に困難である。それに対して、「通仮字」を使う場合、本字を探ること自体は難しい。しかし本字がどの字であるのかわかれば、作者が無意識に使ったものであるだけに逆に、正確に作品の基礎となる方言（音声体系）を、議論の余地なく確実に探ることが可能となるのである。たとえば、原文の56頁の7行目は次のようになっている。「在家千里（日）好、出路一朝難」「里」の字は、明らかな誤りである。そして同音の当て字として「日」の字が使われているのである。中古音（中国の中世時代の字音）

では、「里」の字は止上止来三開、「日」の字は臻入質日三開である。つまり、「里」の字は来母の字で止撮であるのに対して、「日」の字は日母である上に臻撮の入声なのである。中国の古い漢字音を残す日本漢字音でも、「里」は「リ」、「日」は「ニチ」であるので、両字が通假(当て字)になるとは考えにくい。従来の言われていた広東省潮州の方言音でどうなるかという、里の発音は[li<sup>53</sup>]、日の発音は[zik<sup>21</sup>]となるのである。もう一つの説浙江省温州の方言音でどうなるかといえ、里の発音は[lei<sup>53</sup>]、日の発音は[zai<sup>212</sup>] (文読の場合)[nɿai<sup>212</sup>] (白読の場合)となるのである。ここからもわかるように、潮州方言や温州方言が宣徳抄本「劉希必金釵記」の基礎方言だとしたら、明らかに「里」の字と「日」の字の通假関係を説明できないのである。そうであれば、われわれは中国の様々な地域の方言音の報告書を集めて、この二字の字音が一致する地域を見つけなければならない。その上に、通假字は、この一例に限らず数十例あるので、できるならそれらすべてにおいて一致する、唯一の方言地域を見つけ出さなければならない。そうして初めて、宣徳抄本「劉希必金釵記」が書かれ、実際に上演されていた地域を特定できるようになるのである。

ウ) 文法学・訓詁学的方法というのは、語彙・用語・文体などの点で、特徴的なものを見つけ、それを同時代の作品と比較検討して、宣徳抄本「劉希必金釵記」の正確な位置づけを試みるものである。たとえば宣徳抄本「劉希必金釵記」の特徴的な言葉として複数を表す「毎」という字と、場所を表す「行」という字が挙げられる。これらは北方系の官話に特徴的な語彙である。また特徴的な文体として、「免得～」と言い方がある。これらについては、北方の元雜劇や「張協状元」をはじめとする永楽大典戲文などの作品の文体と、比較研究しなければならない。

#### 4. 研究成果

論文『明代宣徳年間抄本『劉希必金釵記』の流伝について(「中国の演劇・音楽の域内・域外における発展・伝播に関する現地調査と文献研究」第2章)』は、本科研費の目的である宣徳抄本の流伝について、研究結果を出したものである。地理的・歴史的・文献学・方言学などの総合的な観点から、宣徳抄本を流伝について調べた。「金釵記」の原本は、福建の建安で出版された元刊本、その後何らかの形で運ばれて江西の地に移り、贛江を南下し、中流域の吉安にたどりついた。この地で書写された。その抄本が、南下して広東との境で

ある南嶺山脈を越えて、潮州にきた。最後に潮州の西の後隴山のふもとで副葬品として、埋葬された。このように結論した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- ①福満正博、江西省弋陽県の弋陽腔初探、人文科学論集、56 輯、2010 年 3 月、104—87、査読無、
- ②福満正博、「宋元以来俗字譜」補正(2) — 『全相平話三国志』、明治大学教養論集、458 号、2010 年 9 月、145—176、査読無
- ③福満正博、劉知遠諸宮調と戯曲白兔記と安徽省の青陽腔白兔記の可能性、明治大学教養論集、462 号、2011 年 1 月、85—101、査読無
- ④福満正博、中国近世戯曲小説の異体字研究(3) — 『劉知遠諸宮調』、明治大学教養論集、467 号、2011 年 3 月、99—164、査読無
- ⑤福満正博、中国近世戯曲小説中の異体字研究(4) — 『大唐三蔵取経記』: 附論・「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」の先後問題について、人文科学論集、57 輯、2011 年 3 月、1—35、査読無
- ⑥汲古閣本白兔記の、曲牌ごとの曲辞異文の所在目録、明治大学教養論集、472 号、2011 年 9 月、85—101、査読無
- ⑦重慶市酉陽県の土家族の陽戲(儺戲)について、人文科学論集、58 輯、2012 年 3 月、25—45、査読無
- ⑧福満正博、明代宣徳年間抄本『劉希必金釵記』の流伝について(「中国の演劇・音楽の域内・域外における発展・伝播に関する現地調査と文献研究」の第 2 章)、明治大学人文科学研究所紀要、第 70 冊、2012 年 3 月、220—243、査読有

〔学会発表〕(計2件)

- ①福満正博、安徽省青陽腔白兔記の可能性、中国九江青陽腔国際学術研討会、中国芸術研究院戯曲研究所、2010 年 9 月 24 日、中国江西省九江市九江学院
- ②福満正博、劉文龍与儺戲、中国重慶陽戲(儺戲)国際学術検討会、中国儺戲学研究会、2011 年 11 月 15 日、中国重慶市

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:

番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福満 正博(FUKUMITU MASAHIRO)  
明治大学・経営学部・教授  
研究者番号：60165313

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：